

児童の「思考力・表現力」を 高める授業実践研究

～4学年の作文指導を取り上げて～



埼玉県さいたま市立海老沼小学校教諭 菊池 健一

I はじめに

先日公表された、新学習指導要領において、引き続き「思考力・判断力・表現力」を高める指導を工夫する必要が強調された。ここでは、自分の考えを言葉で表現することの重要性が示されていると言える。

しかしながら、児童は作文学習に苦手意識を示すことが多い。授業中に何か自分の考えを書く活動を取り上げた際に全く書けない児童も多く見受けられる。この理由として、大きく3つの原因を考えた。1つは「書くべき自分の考えがないから」であり、もう1つは「書き方が分からないから」そして、「書くことに慣れていないから」の3つである。これらの原因を取り除いていけば、児童が生き生きと自分の考えを書くことができるようになると考えた。そこでこのような状況を打破し、児童が自分の考えを生き生きと表現できるようにするために行った実践と効果を以下に示し、児童の「思考力・表現力」を高めるための具体的な提案をしたいと考える。

具体的な取り組みは、日常的な取り組みとしての「NIE」「辞書引き学習」そして「接続語カード」の活用や「書くことを言語活動とし

II 研究の構想

1 目指す児童像

本研究における、「思考力・表現力」を高める取り組みにより、育成したいと考える児童像は以下のとおりである。

- (1) 自分の考えや意見を明確にもてる児童
- (2) 自分の考えを論理的に表現できる児童
- (3) 自分の考えを進んで友達などに発表できる児童

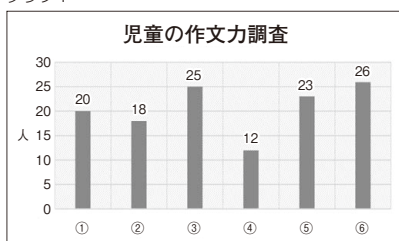
2 児童の課題

(1) 児童の作文の現状より

担当していた児童の年度当初の様子から、児童の作文を書く学習の課題を捉えてみたいと考えた。年度当初に児童(35名)に「4年生になってがんばりたいこと」というテーマで作文を書かせ、その作文を分析した。分析した内容に

つについては、筆者が設定した「作文力」を測定する項目である。その結果は以下のものである。

グラフ1



【児童の論理力の判定に用いた内容】

- ①400字原稿用紙の8割以上の字数で書けているか
- ②段落分けは適切か
- ③自分の考えをきちんと示しているか
- ④自分の考えを論証できているか
- ⑤誤字や脱字はないか
- ⑥制限時間内に文章を書き終えられたか

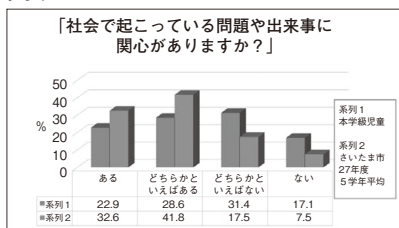
この結果から、多くの児童が自分の考えの書き表し方が分からないでいることが明らかになった。また、自分の考えを論証したり、効果的に言葉を使って表現したりすることに課題があることも明らかになった。

(2)児童の意識調査より

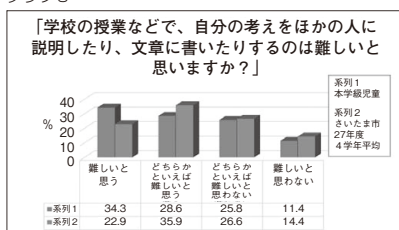
児童の表現活動に関する意識や社会的事象に関する興味関心を調べる調査も行った。調査にはさいたま市で27年度より実施されている学力学習状況調査にある生活に関する調査の項目を活用した。この調査にはさいたま市の全児童が回答しているデータがあるので、さいたま市全体の児童の平均値とも比較でき、担当する児童の現在の状況や、研究の成果や課題を把握しや

すいと考えた。本学級児童の年度当初の意識調査の結果は以下の通りである。

グラフ2



グラフ3



結果より、児童は自分が自分の意見を明確にもち、それを友達に伝えることに困難さを感じていることが分かった。

3 研究の仮説

児童の課題から、目指す児童像を実現するために、以下に示す3つの仮説を立てた。

仮説1：児童が豊かな語彙を習得することによって、自分の考えや感じたことを豊かに表現することができるであろう。

仮説2：児童にとって興味をもちやすい学習材を取り入れることによって、児童が進んで自分の考えを表現するようになるであろう。

仮説3：児童が自分の考えを表現しやすいツールを活用することで、自分の考えを論理的に表現できるようになるであろう。

4 研究に迫るための手立て

(1)仮説1に迫る手立て：辞書引き学習法

仮説1では、児童の語彙力を高めることにより、作文で自分の考えを表現する能力を高めることをねらいにしている。豊かな語彙を得るためには、身近でたくさんさんの語彙に親しむ必要があると考え、「辞書引き学習法」を取り上げ、多くの語彙を獲得できるようにした。

(2)仮説2に迫る手立て：NIE(教育に新聞を)

仮説2では、児童が意欲的に自分の考えをもち、進んで表現できるようにすることを狙いとしている。児童の意欲を高めていくためには、児童にとって自分事として捉えられるような材料を活用する必要がある。そこで、新聞を活用したNIEを導入することにより、児童が社会とのつながりを感じながら、意欲的に学習できるようにした。

(3)仮説3に迫る手立て

仮説3では、仮説1・2で行う方策を基礎として、実際に児童が自分の考えをもち、それを友達に論理的に表現できる力を養うための方策を行った。

III 指導の実際

1 「辞書引き学習法」の取り組み…仮説①に対応する取り組み

児童が多くの語彙を獲得し、自分の考えや気持ち豊かに表現するために、「辞書引き学習法」を導入した。「辞書引き学習法」とは、中部大学教授である深谷主助氏が提唱する学習法で、これまでは知らない言葉の意味を調べることのみ行われてきた活用方法を逆転し、辞典から知っている言葉を見つける活動を行う。

私の担当する学級でもこ

の「辞書引き学習法」を取り入れた。まずは、オリエンテーションを行い、辞典から知っている言葉を見つける活動を行った。数カ月の実践でどの児童も100枚以上の付箋をつけ、一番



●辞書引き学習を行った辞典(左)



●8000枚以上の付箋が付けられた辞典(右)

多い児童では8000枚以上の付箋をつけた。この辞書引き学習を年間通じて実践した結果、児童の言葉への関心が高まり、積極的に言葉を選んで使う態度が身に付いた。作文を取り上げた国語科授業でも辞典を活用して、これまで以上に適切な語彙を使用する児童が増えた。

2 日常的な「NIE」の実践…仮説②に対応する取り組み

(1)「朝の新聞トーク」の実施

朝の学活に児童が関心をもちそうな記事を紹介し、記事について話し合う時間を設けた。短い時間であるが、記事に毎日触れることにより、社会への関心が高まった。



●児童に示した新聞記事の例

年間を通して、この活動が続けることで、児童が記事について自分なりの考えをもてるようになってきただけでなく、積極的に自宅などで社会的な事象に触れる機会をもつようになってきたという成果も得られた。

(2)新聞掲示の工夫

児童が、いつでも日常的に新聞に触れることができるように、新聞の掲示を行った。まずは、昇降口に掲示するコーナーである。ここに複数の新聞を掲示し、読み比べができるようにした。



●昇降口の新聞掲示板の様子

(3)「新聞スクラップ」の実施

新聞にはたくさんさんの記事が掲載されており、それを一覧できるという特性がある。この特性

を生かして、児童が自分の興味関心にもとづいて学習する素材を選べるのが新聞スクラップの利点である。



●新聞スクラップノート

児童は、自分で好きな新聞記事を選んで教材とすることができ、大変意欲的に活動に取り組んだ。この時間に友達同士で発表し合うことを繰り返すことで、児童が自信をもって自分の考えを発表する意識が芽生えてきた。

この新聞スクラップを通して、本研究で目指す「自分の考えをもつ力」そして、「進んで自分の考えを発表する意欲」を十分に高めることができたと考える。

(4)NIEを取り入れた授業実践

NIEは学習の内容で3つの種類に整理されている。1つは「新聞機能学習」で新聞の機能や役割を学ぶ学習である。もう1つは「新聞活用学習」で、授業の中で資料として新聞を活用する学習である。最後の1つは「新聞製作学習」で、実際に新聞を作る学習である。この3つの学習をバランスよく、学年の年間指導計画とも合わせながら実践した。

まず、「新聞機能学習」では、前述の新聞スクラップの活動により新聞の構成や役割などを

学んだ。また、国語科の「新聞を作ろう」という単元の中で、新聞がどのような役割をするのかを学ぶ授業を取り入れた。授業にはゲストティーチャーとして新聞社の方を招き、新聞の構成や読み方などについて解説していただいた。



●新聞社の社員による特別授業の様子

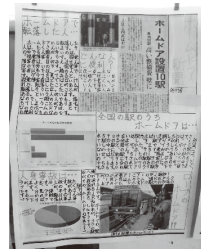
そして、国語科では、「話の組み立てを考え、発表しよう」という単元（教育出版国語4年）において、「お気に入りの新聞写真を紹介する」活動を言語活動として取り上げた実践を行った。児童は、それまでの新聞スクラップ学習で培った新聞を読む力を生かして、自分が紹介したい新聞写真を選び、その写真にオリジナルの見出しや解説、そして自分が写真を見て感じたことなどを書き、友達に発表することができた。



●紹介したい新聞写真を選ぶ児童

さらに、「新聞製作学習」にも取り組んだ。国語や社会科、理科の学習で調べたり体験したりした内容を新聞にまとめた新聞づくり慣れてくるにしたがって、割り付けを自分で工夫す

るなど、新聞づくりを通して、表現力も高まってきた。新聞づくりを通して、新聞に表現する力だけではなく、新聞を活用して発表する力も高まってきた。

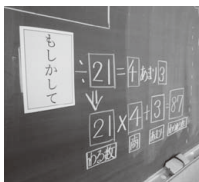


●児童が作成した学習新聞

3 日常的な表現活動での実践：仮説③に対する取り組み

(1)「接続語カード」の活用

担当する児童が上手に話の組み立てを考えるのが苦手だという課題があった。そこで、論理を意識させるために「接続語カード」を作成し、児童が事前にどのカードを使って作文を書くかをあらかじめ決めて作文に取り組ませた。この「接続語カード」を活用して文章の作成に取り



●接続語カードを使う児童（左）

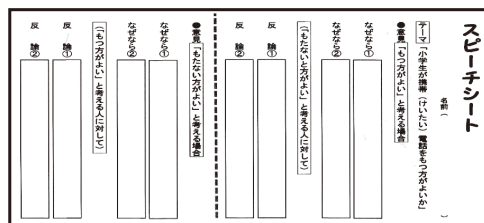
●接続語カードを使った授業の様子（右）

組むことで、児童が文章の流れを事前に考えることができるので、迷いなく文章を書くことができるようになった。また、普段の国語授業のほか、他教科領域の授業においても、文章を記述する際にもこのカードを活用すること、児童が論理的な

文章を書けるようになった。

(2)「ロジカルスピーチ」の実施

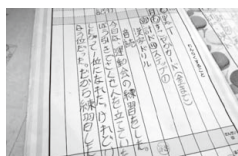
朝の時間を活用して児童が自分の考えを表現する時間を設けた。テーマとして取り上げたのは、「小学生が携帯をもつ方がよいか」など、児童が考えやすいものにし、自由に意見を述べるようにした。この取り組みにより、自分の考えをしっかりとつづることができた。



●スピーチシート

(3)「三文作文」の導入
児童が作文を書く活動を習慣化するために、連絡帳を活用して取り組みを工夫した。児童は毎日、連絡事項を連絡帳に記入する。その際に、「三文作文」を取り入れた。

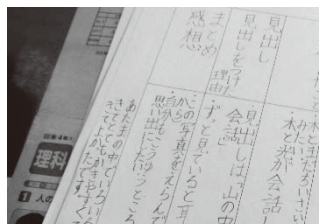
書く内容は、その日の出来事や感じたことなどにし、児童が書きやすいものにした。児童が書いた作文には、教師が目を通してコメントを加えた。また、保護者にも読んでもらい、可能な限り児童に声掛けを



●児童の連絡帳に書かれた「三文作文」

してもらった。この取り組みにより、児童に毎日作文を書かせる機会を設けられ、作文への苦手意識を少なくすることができた。

(4) 作文を「言語活動」として取り上げた単元実践
担当する学級で活用している国語教科書（教育出版）に「お気に入りの写真を紹介する」活動を取り入れている単元がある。これは、学習指導要領に示された「図表や絵、写真などから読み取ったことを基に話したり、聞いたりすること」という言語活動を具現化したものである。この単元を活用し、児童が自分で選んだ写真を友達に紹介する学習を行った。



●児童のスピーチメモ

IV 研究の成果と課題

1 児童の変容

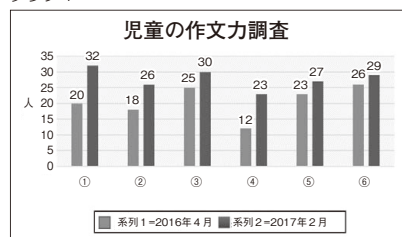
(1) 児童の作文調査より

児童の表現力の変容を見るために、年度当初と研究が終わる2月に調査を行った。具体的には、児童に400字の課題文を書かせて、以下に示す項目を達成しているかを判定した。判定に用いた項目は以下の通りである。

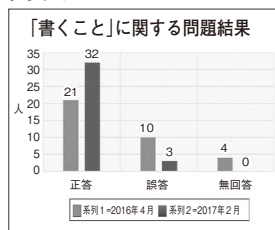
【児童の論理力の判定に用いた内容】

- ① 400字原稿用紙の8割以上の字数で書けているか
- ② 段落分けは適切か
- ③ 自分の考えをきちんと示しているか
- ④ 自分の考えを論証できているか
- ⑤ 誤字や脱字はないか
- ⑥ 制限時間内に文章を書き終えられたか

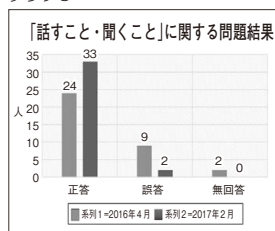
グラフ4



グラフ5



グラフ6



いの様子の会話が示され、その会話文から発言の真意などを選択する問題が出題されていた。問題の達成状況を調査した結果は以下の通りである（グラフ6）。

以上の項目で児童に意見文を書かせた。当初は苦手感を示す児童が多かったが、前述の取り組みを行うことによって、児童の書く力が向上し、その成果が作文に表れるようになった。

(2) さいたま市学力調査問題から

さいたま市では、平成27年度より市独自に学習状況調査に取り組んでいる。国語科では、領域ごとに問題が作られている。その中で「書くこと」に関する問題と「話すこと・聞くこと」に関する問題を活用した。年度当初と研究終了後の結果を比較した。

「書くこと」に関する問題の結果は以下の通りである（グラフ5）。

この問題は、本に書いてある目玉焼きに関する作り方をメモにまとめ直す記述問題である。「話すこと・聞くこと」に関する問題は、話合

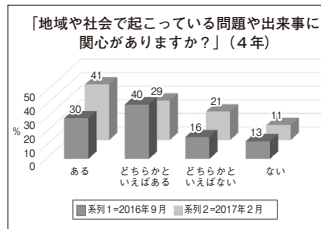
(3) さいたま市学力調査（生活調査）を活用した調査
さいたま市の学力調査では、学力問題と同時に生活に関するアンケート調査も行われている。そのアンケート調査を活用して、今回の研究の取り組みで児童にどのような情意面での変化があったかを確かめることとした。

取り上げた項目は、「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか」という、社会への関心を問う質問である。作文力を高めるために、社会的な事象を取り上げて、考えをもつ意欲を高める必要があると考えた。その結果は以下の通りである（グラフ7）。取り組みを始めた9月段階よりも取り組みが終わりに近づいた2月の方が肯定的な回答が多くなっている。

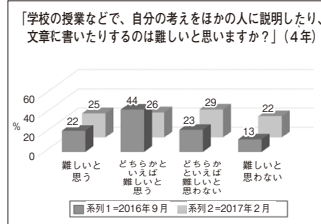
この結果は、これまでの取り組みにおいて、社会的な事象と多く触れることで、児童の意欲が高まったためと考えられる。

次に、「学校の授業などで、自分の考えをほかの人に説明したり、文章に書いたりするのは難しいと思いますか？」という設問を取り上げた（グラフ8）。市の平均では肯定的な回答をしているのが約45%なので、今回の研究の取り組みで優位に成果があったと考えられる。

グラフ7



グラフ8



2 今後の課題
今回の取り組みにより、児童の作文を書く技術や表現力を高め、意欲も向上させることができた。しかしながら、取り組み後もまだ、作文に苦手感を感じている児童や書く活動が十分にできていない児童もいた。今回の研究では全体的な指導が主な内容となり、個別の支援についての取り組みに関しては十分に行ったとはいえない。苦手感を感じている児童や書く活動が十

分にできない児童には、特別支援教育的な支援が必要な児童もいた。そのような児童に対しての個に応じた指導の工夫も必要である。

今後は、今回の研究をさらに発展させ、全体的な指導の工夫のほか、個別の支援にも取り組みたいと考える。そして、児童の認知過程に合わせ、個に応じた指導法を確立したい。

V 終わりに

新しい指導要領では「社会に開かれた教育課程」がキーワードである。「社会に開かれた」とは、地域社会と協力して教育を行う面と、もう一つは社会と学校で学習する内容をリンクさせる必要があることだと考えている。今回の研究ではその点を重要視して取り組んだ。

今後、今回の研究をさらに発展させ、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指していきたいと考える。

〈参考文献等〉

- 1 「小学校学習指導要領解説 国語編」（文部科学省）
- 2 「『キー・コンピテンシー』に基づく学習指導法のモデル開発に関する研究（国立教育政策研究所）
- 3 「読解力向上に関する指導資料 PISA調査（読解力）の結果分析と改善の方向」（文部科学省）
- 4 「7歳から『辞書』を引いて頭をきたえる」 深谷圭助（ずばる舎）
- 5 「辞書引き学習で子どもが見る変わる」 深谷圭助（小学館）
- 6 「本当の学力」は作文で劇的に伸びる」 若永奈雄（大和出版）
- 7 子どもを頭をきたえる「5分作文」 宮川俊彦（PHP）
- 8 「出口式 親子で学ぶはじめての論理国語」 出口 汪（水王舎）
- 9 さいたま市教育研究所HP <http://www.saitama-city.ed.jp/>

受賞の言葉

菊池 健一

この度は、本実践を「わたしの教育記録」特別賞に選んでいただきましてありがとうございます。大変うれしく思います。

私自身、四十を過ぎ、教員生活も来年度で二十年目になります。これまで、がむしゃらに目の前の課題に取り組み、自分なりにがんばってまいりました。

「論語」では「四十にして惑わず」とありますが、現在も新たな課題が毎日のように出てきており、とてもその境地には達することはできていません。しかし、今回このような大きな賞をいただくことで、自分の実践に自信をもつことができました。今後もさらに精進して、子どもたちのためにがんばってまいりたいと思います。今回の受賞は私一人の力で成しえたものではございません。前任校よりご指導をいただき、私を文部科学大臣優秀教員に推挙していただいた、本校前校長である原田守康先生、そして、いつも職員を温かく見守り、優しく包み込んでくださっている、現校長の森裕子先生に御礼を申し上げます。

また、本校の同士の先生方、そして何よりも、私のような頼りない学年主任をいつも支えてくださっている、小坂井祐子先生、関口丈樹先生に感謝の気持ちを示したいと思います。本当にありがとうございます。